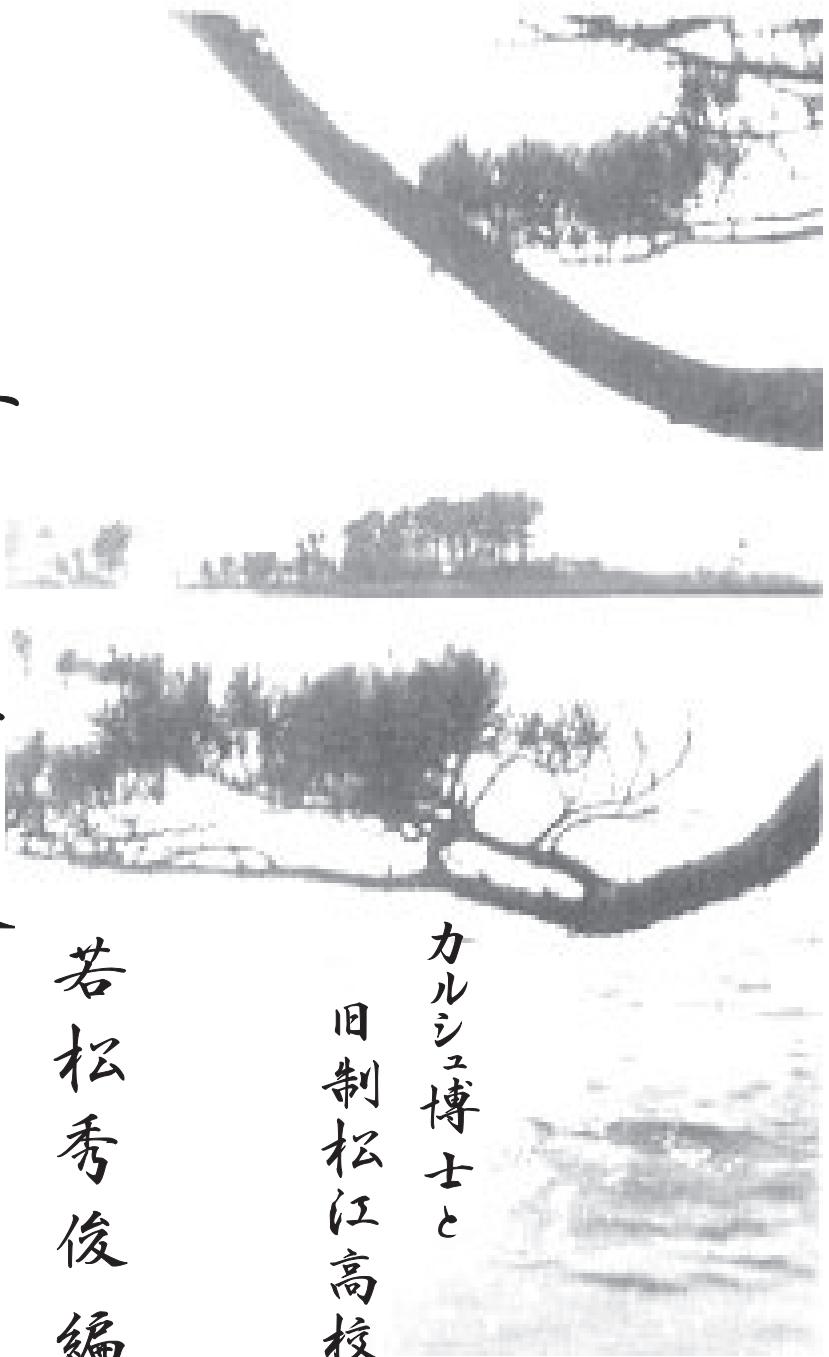


忘れ得ぬ偉人

若松秀俊編

カルシュ博士と

旧制松江高校



忘れ得ぬ偉人

多くの若者を育んだ

フリツワ・カルシュ

松江での日々と

日本への想い

若松秀俊

編



中海の向こうに見える雄峰大山
(フリツツ・カルシュ自筆画)

カルシュ先生は幼少の頃、まだ見たことのなかつた

大山の夢を

何度も見たことがあります。

人の世の縁の不思議を感じる言葉です。

きっとこの景色が

最も好きだったのでしょう。



Dr. Fritz Karsch 1893-1971

目 次

まえがき	一三
序 章 今なぜカルシュ博士なのか?	一五
第一章 私とカルシュ博士との出会い	一六
第二章 フリツツ カルシュ博士の生涯	一一
第三章 カルシュ先生の足跡	一四
三・一 日本との出会い	一四
三・二 旧制松江高等学校ドイツ語教師として	一六
三・三 外官として	一七
第四章 家族との生活	一九
四・一 メヒテルトの言葉	一九
四・二 松江での生活	一九
四・三 横浜・東京での生活	三〇
四・四 戦後の日本での生活	三三
四・五 帰国後の家族三人の生活	三四
四・六 メヒテルトのアメリカでの生活	三五
第五章 学問と著述	三七

五・一 恩師 ハルトマン	三七
五・二 カルシユの学術業績	三八
五・三 人智學とシユタイン	三九
第六章 カルシユと生徒達	
六・一 変な外人さん	四二
六・二 プラーゲン	四三
六・三 カルシユ先生との初対面	四五
六・四 シュパチーレンゲーエン	四六
六・五 光は東方より	四九
六・六 ナチョナーレ クライドウング	五〇
六・七 強行軍	五一
六・八 学園祭の時	五二
第七章 カルシユ先生のドイツ語	
七・一 厳しいプラーゲ先生	五四
七・二 プラーゲ先生の小言	五五
七・三 プラーゲ先生と拳骨教育	五六
七・四 カルシユ先生との出会い	五七

まえがき

ドイツでほんの偶然から一人の女性と出会つたことが私を大きく変えた。「袖すり合つも他生の縁」というが、全く縁もゆかりもない、存在すら知らなかつたカルシュ博士を、今こうして紹介する立場になつたことの因縁の不思議さをしみじみと思う。カルシュ博士の調査では焦点を絞ると殆ど確実に必要な、また偶然に関連情報が手に入るその不思議さを常に感じてきた。多くの人々が自然な形で協力の輪を広げてくれたことに心より感謝している。

私は一九七三～七五年にドイツ学術交流会の奨学生としてドイツ政府より奨学金の給費を受け、エルランゲン＝ニュルンベルグ大学医学部の第一生理学教室¹でバイオサイバнетイクスに関する研究をカイデル教授とプラティヒ教授のもとで行つた。ドイツの文化とそれを生んだ風土に若き日に触れる機会をドイツ政府から与えられた私が、四半世紀後にドイツで開催された国際会議の折に、偶然にもカルシュ博士の娘に会つて、この仕事に携わることとなつたことを、私に賜つた天命と考えるようになつた。

私はシステム工学をもともと専門としており、縁あつて生物・医学をこの立場から三十年を越えて体系的に研究してきた。若き日に東京大学の水島生化学教授の講演に感動し、生体工学に興味をもつて、システム工学を専門とする横浜国立大学の関口隆教授のもとで学んだことが、ドイツ留学に連なり、さらに生体機能の制御や医療機器の開発に繋がつた。現在、医学系大学院所属であるが、研究室は医学部出身以外に電気工学、電子情報工学、金属熱工学、化学工学、物理学、農学、看護学など他大学他学部出身の、また外国人の大学院生を容し、外国人との研究も積極的に行つている。

カルシュ博士の調査をしながら、学生時代に私のドイツに対する興味から、ゲルマニストに転向を横浜国

¹ 現在のバイオサイバнетイクス研究所である。当時は Prof. Dr. Wolf D. Keidel をリーダーとする聽覚生理学の中心であった。彼は学術雑誌「Biocybernetics」の編集長であった。

立大学の阿部賀隆教授から勧められたことを折に触れて思い出す。全く見も知らなかつたカルシュ博士に偶然出会つて以来、種々の施設を訪ね、調査を行つてゐる間に、思わぬ人に出会すこともしばしばであつた。そうした出会いが自分の人生の中でどれほど重要な意味をもつて来たのか、またこれからどんな意味をもつことになるのかを考えてきた。この中につけて、いろいろと戸惑いもあつたが、基本的にはロマンと楽しさを感じるものであつた。

以下では、調査の中で知り得たことをできるだけ忠実に、内容の整合性を考慮しながら事実に即して編集記述²した。

²) の書は1100一年に綴つたものでその時点での記述になつていふ。

序 章 今なぜカルシュ博士なのか？

序章 今なぜカルシュ博士なのか？

カルシュ博士の存在を偶然に知り、僅かな手掛かりを辿って事実を発掘し、彼の足跡を追跡する中で私は彼の偉大さを知った。カルシュ博士は直接・間接に接したことのある人以外には誰も彼を知らないほど、日本では残念ながら名の無い哲学者である。だからといって評価に値しないわけではないと思つていて。したがつて、いままぜカルシュ博士なのかといえば、それは隠れたまでは紛れた彼の功績を発掘しまどめておき、同時に彼の縁者が元気なうちに少しでも多くの生の声を収録しておきたいからなのである。実際に、縁者達も自分が元気なうちに統一的に記録して置かなければ、遠からずして、すべての記憶が消滅する運命にあると心配している。これまで彼の縁者以外で、客観的な資料をもとにカルシュ博士を見ようとしたのは私が初めてということと、調査には縁者の皆さんが全面的に協力してくれた。折しも、昨年、一〇〇〇年は私が総務理事を務めるドイツ学術交流会（DAAD）の留学生会でもドイツ関連の行事を重ね、去る六月十六日にはドイツ学術交流会創設七十五周年記念式典が、東京ドイツ文化会館でドイツ大使ケストナー博士（Dr. U. Kaestner）、東京事務所所長リンス博士（Dr. U.Lins）、佐藤禎一文部事務次官の臨席の上で催された。併せてデュースブルグ大学のアモン教授（Prof.U.Ammon）の記念講演およびシンポジウム、元留学生音楽家による音乐会を行つた。六月二十七日にはドイツ大使公邸に招かれ、その折これに触れたところ、七月になつて、調査激励と成功を祈る手紙を戴いた。ところで、ドイツ学術交流会を創設し、ドイツが世界と本格的な学術交流を始めた大正十四年は奇しくも、カルシュ博士が来日した年でもある。DAAD創設七十五周年の昨年はドイツでは周知のように「日本年」にあたり、特に日本との関係を重視した催し物がドイツ各地で行われた。日本をこよなく愛し、多くの人材を育成したカルシュ博士は戦中・戦後の混乱時に埋もれ、殆どの日本人がその存在すら知らない状況にある。私がカルシュ博士を知ったのは全くの偶然であるが、このように状況が熟している今こそ、カルシュ博士を正しく知つてもう好機であると思う。しかし、これらのことには関係なく、前述のようにただひたすら彼の業績と日本における功績のみに注目した顕彰を行い、後はそれを知つた人々の判断と評価に任せるべきかと思つていて。

第一章 私とカルシュ博士との出会い

シュトゥットガルトのとある小さなホテルでの一九九九年九月五日朝のことである。カルシュ博士の靈が偶然にも、私を導いて、彼との最初の出会いの機会を用意してくれた。カルシュという名前は私にとつては全く未知で、見たことも、聞いたこともない名前であった。当時、私は、二十年来の親しい友人であるデュースブルグ大学のフランク教授³が大会長を務めるカールスルーエでの第三回ヨーロッパシステム制御会議の国際プログラム委員として、また「呼吸循環制御」と「眼球運動」に関する発表と座長の任を無事に務めて、会議に別れを告げたところであった。

せつかく同行参加した同僚の張林曉博士と室蘭工業大学の高原健爾博士とも相談して、同四日に週末休暇を利用して、私自身も未だ訪れたことのなかつたこのシュトゥットガルトの街に足を踏み入れた。その日の宿を決めてなかつた我々は中央駅のインフォメーションで二軒の安価な、一晩九十マルクの小さなホテルを紹介してもらつた。どちらにするか、ちょっと迷つたが、こちらと指して、城内公園 (Schloßgarten) の近くに宿をとつたのが、この運命の出会いの始まりであった。そのホテルの名はホテル アム フリー・デン プラツツであった。⁴

この日の三人でのガストシュテッテ(Gaststätte)での昼食はいろいろと話題が弾み、とても楽しかったこと、そして鶏の丸焼きがとてもおいしかつたことを覚えている。街のあちこちを見物する前のことがあつた。この日は丁度、州知事の誕生日があり、官邸の広場で楽隊の行進と演奏に幸運にも遭遇し、土地の人とも親しく語り合つた。

³ 専門は互いに異なるが前出の Prof. Dr. U. Ammon と Prof. Dr. P. Frank は同じ大学に勤務し、親しい関係にあることがわかつた。

⁴ Friederun と出会つた場所が Friedenplatz で、その名称が不思議なことに一致していた。また、彼女の日本名は Hide-ko、編者の名前は Hide-toshi である。ずつとも後で気がついたことであるが、ここにもやはり彼女の父 Fritz の意志が感じられた。何という偶然であろう。私とカルシュとの出会いに幾重にも偶然が働いていたのだった。

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。